

広島経済大学研究論集
第37巻第4号 2015年3月

広島経済大学経済学会

2014年度 第4回研究集会〔2014年11月25日(火)〕報告要旨

「市民性教育」としての「倫理」カリキュラムの視点

嵐 森 裕 暢*

はじめに

報告者が取り組んでいる研究(以下、本研究)は、高等学校公民科の中でも、道德教育の中核的な役割を期待されている科目「倫理」の従前のカリキュラムを、「市民性教育」としてのそれへと改善することを目的としている。

科学・技術の進歩等に伴い現代社会が急変する中、われわれが抱えるようになった倫理的諸問題には、これまで規準にしてきた価値観の枠を越えるものも多い。したがってこれからの学校教育において育成が求められる市民的資質の中核には、現代社会の倫理的問題の認識とそれに対する自己の価値観形成だけでなく、将来にわたって問題を自らにも関わる切実なこととして認識し、それに対する自己の価値観を、既存の多様な諸価値観を手がかりにしながら自ら吟味したり修正したりしていく、すなわち形成していく力があると考えられる。筆者はこれを、「現代社会の倫理的問題に対する価値観形成力」(以下「価値観形成力」と呼びたい。

このような資質の育成には、社会についての科学的な事実認識や価値認識を通して市民的資質を育成しようとしてきた社会認識教育(すなわち「市民性教育」)、中でも価値認識に深く関わる「倫理」教育がますます重要になると考えられるのである。

1. これまでの「倫理」カリキュラムの抱える課題

しかしこうした動きに対し、従前の公民科「倫理」教育、その根幹を成すカリキュラムは十分に応えうるものとはなっていないのである。こうした高等学校現場の実践の基準になっているのは高等学校学習指導要領「倫理」の内容構成であり、これを分析すると、従前のカリキュラムの基本的な課題が明らかとなる。

そこにある主要な課題は次の3点である¹⁾。

第1に、現代社会及び内包されている倫理的問題の認識を十分させるようになっていないことである。すなわち、現代社会の特質と倫理的問題について扱うのは基本的に年度終盤になってからであり、年間を通して問題を考えさせるようになっていないのである。これでは、倫理的問題に対する自己の価値観を吟味したり、修正したりして試みるのが十分できない。

第2に、倫理的問題に対する自己の価値観を形成する手がかりであるはずの、先人などの思想や考え方の理解が、実際に倫理的問題を取り上げる前に位置づけられていることである。また、手がかりにするにはどのようにすればよいかも十分示されていないことである。これでは生徒は、倫理的問題と関わりなく、先人の思想を理解させられたり、教え込まれたりするだけに止まってしまう。このような教養主義的で、閉ざされた学習によっては、倫理的問題に対するのとは別の固定的な価値観が確立されるだけ

* 広島経済大学経済学部准教授

であり、従来の規準によっては直ちに判断できないような今日の倫理的問題に対するそれは形成できない。

第3に、生徒が主体的に倫理的問題に対する自己の価値観を形成してみる、さらにはそれを繰り返してみるようにはなっていないことである。これでは、学習指導要領上も求められるようになってきている「倫理的な見方や考え方」、すなわち倫理的問題を切実なこととして気づき、他者の価値観などを手がかりにして、その問題に対する自己の価値観を形成する資質を形成することは困難となる。

これらの学習指導要領の内容構成上の課題の背景には、高等学校における道德教育の考え方として、これまで公民科「倫理」の目標に組み入れられてきた「人間としての在り方生き方に関する教育」（以下、「在り方生き方教育」という考え方があると考えられる。

この考え方は、基本的に生徒の人生観・世界観ないし価値観の確立を求めるものであるが、そのための現代社会の認識を重視していないと考えられる。なぜなら、上述の通りの内容構成だからである。また、現代社会の事実認識に深く関わり、「倫理」との連携も求められている科目「政治・経済」の目標には「在り方生き方教育」に関する記述がないのである。

この考え方は、現代社会の認識とは別に、先人の思想や考え方等を理解させておくことで、生徒の価値観の確立を目指していると考えられる。

2. 「市民性教育」としての「倫理」カリキュラムの視点

では、このような課題を克服するカリキュラム編成の視点はどのようなものだろうか。

まず、現代社会及びその根本にある倫理的問題を年間を通して扱えるようにすることである。

次に、その倫理的問題に対する他者の価値観

を生徒が見付け選びとり、それを自己の価値観の吟味や修正（すなわち形成）の手がかりにできるようにすることである。

さらに、このような主体的で開かれた学習を繰り返して行えるようにすることである。すなわち、生徒が繰り返し、現代社会の倫理的問題に対し、他者の価値観を手がかりにして自己の価値観を吟味したり、修正したりする学習をしてゆくことで、開かれた価値観を形成できるとともに、「価値観形成力」（ないし「倫理的な見方や考え方」）を育成しようとするのである。

3. 市民的資質を育成する「倫理」カリキュラムの構造

このような視点を踏まえると、年間の「倫理」カリキュラムの構造は次のようになる。

①導入部には、諸社会問題の認識を通して、生徒がそれらの根本、基本にある倫理的問題に気づき、自分の問題として考えてみて、一先ずそれらに対して価値判断した内容（すなわちこの段階での自己の価値観）を表現してみる。

②展開部には、それらの現代社会の倫理的諸問題について、先ず現代の社会構造に関する（主として民主主義、資本主義に関する）倫理的問題を、次いで現代の文化構造に関する（主として生命、情報、環境に関する）倫理的問題を取り上げ、繰り返し自己の価値観を吟味したり修正したりしていく。

③終結部では、これらの現代社会の倫理的諸問題が生じてきた中核的な要因と考えられる科学・技術の発展に関する（主として原子力の発見と開発に関する）倫理的問題を取り上げ、これに対する自己の価値観を、これまでの学習を総動員するとともに、新たな他者の価値観も手がかりにして形成していく。

また、倫理的問題を取り上げる各単元は次のような展開となる。

①導入部では、現代社会の倫理的問題に気づ

き、自らにも切実なこととして認識し、それに対する価値判断（自己の価値観）を表現してみる。またそれをよりよくするための学習を計画する。

②展開部では、計画により、手がかりとなる先人の価値観を調べ、理解や比較をし、手がかりとなる点を摂取する（すなわち先人との対話をする）。また、摂取して修正した自己の価値観を表現し合い、吟味し合い、手がかりとなる点は接収する（すなわち学級の仲間と対話する）。

③終結部では、問題に対して吟味や修正をしてきた自己の価値観を表現し合い、評価し合い、（計画・実施した学習についても評価し合い、）残された課題に気付く。

おわりに

このような視点及び構造に基づく「倫理」の年間レベルのカリキュラムデザイン案及び、各単元の構成案については拙稿において既に示してきた²⁾。現在は、これに基づき単元構成の理論仮説をつくり、カリキュラムデザインを修正し、全単元の開発を進めている。特に展開部の倫理的諸問題を取り上げた単元については、それぞれ広島県内の高等学校及び本学の授業において一部を実施し、その結果をもとに改善を行っている。

今後は、これまでに明らかにしたカリキュラムの理論仮説及び開発した全単元を統合してみ、それらの整合性を吟味し、「市民性教育」としての「倫理」カリキュラムを構築していきたい。

本研究集会では、このように開発しつつあるカリキュラムデザインとそれに基づく幾つかの

単元を提示することが出来た。参加者の皆様からは貴重な御批判、御示唆を頂くことができた。（近似の内容を学生に実践した場合、どのような手ごたえが得られるのか、倫理学の講義としてはどのような意義を持つと考えられるか、必要な知識は、よく教示しておく必要があるのではないか、等。）

さらに筆者が、かつて「在り方生き方教育」の視点から開発した単元と、本研究で「市民性教育」の視点から開発した単元とを対比し御検討頂くこともでき、有難い機会となった。

今回の発表と報告を通して、これまでの自身の研究を整理することができ、前進していく力を与えていただいた。このような機会を与えてくださった皆様に感謝申し上げたい。

注

- 1) 胤森裕暢『「倫理」カリキュラムの改善—市民的資質育成の観点から—』『広島経済大学研究論集』第36巻第2号, 2013年, pp. 82-84 参照。
- 2) 同論文, pp. 86-89.

参考文献

- 胤森裕暢「新聞を活用した公民科『倫理』の授業改善」日本NIE学会『日本NIE学会誌』第7号, 2012年。
- 胤森裕暢「倫理的問題に対する価値観を形成する『倫理』の学習—ソクラテスとプラトンの『人物研究』を取り入れた民主主義の学習を事例に—」日本社会科教育学会『社会科教育研究』No. 120, 2013年。
- 胤森裕暢「対話を重視した『価値観形成学習』による『倫理』の授業開発—単元『ジョブズとゲイツの挑戦—資本主義の倫理的問題を考える—』—」全国社会科教育学会『社会科研究』第80号, 2014年。
- 胤森裕暢『「価値観形成力」を育成する環境倫理授業の改善』社会系教科教育学会『社会系教科教育学研究』第26号, 2014年。